

簡便な公共牧場の経営管理指標

各公共牧場の放牧頭数や事業収支等から得られる放牧強度、粗収益係数、損益分岐点分析結果の3点を経営管理指標とすることで、管理運営の現状把握や経営改善目標の設定が簡便に行える。

経営管理指標の算出

各公共牧場の延べ放牧実績、事業収支等から次式により指標となる3点を算出する。

放牧強度：延放牧頭数 ÷ 放牧対象面積

粗収益係数：事業収入 ÷ 事業支出 × 100

$$\text{損益分岐点分析： 延放牧頭数} = \frac{\text{固定費}}{1 - \frac{\text{変動費}}{\text{事業収入}}} \times \frac{1}{\text{預託料金}}$$

経営管理指標の意義

放牧強度：放牧地の利用効率を示す指標。これを牧養力(単位面積当たりの牧草量 = 放牧地単位面積当たりで養える牛の頭数)の目標値 420CD(カデ-)と比較する。

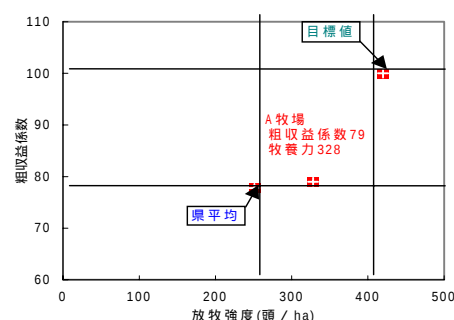
粗収益係数：収益を得るためにどれだけ経費がかかったのかを知るための係数。利益を得るためには100以上が目安となる。

損益分岐点分析：「事業損益が±0」となるような運営費用(固定費と変動費)、事業収入、預託料金、利用頭数のバランスを知るのに有効な手段。例えば、現状の預託料金では利用頭数はどれだけになれば良いのかなどを知ることができる。

経営管理指標の利用例

放牧強度と粗収益係数を目標値や平均値、あるいは他の牧場と比較して、A牧場の状況を判断する(右図)。

県平均と比較すると放牧強度は高いが、粗収益係数は県平均をやや上回る程度であることがわかる。



次に、損益分岐点分析を用いて運営改善の糸口を見つける。

図1 放牧強度と粗収益係数の関係図

A牧場の現状は、

利用頭数：52,526頭 預託料金：230円 事業損益：-2,311,000円

であるとして、これを事業損益±0にするための組み合わせを損益分岐点分析で調べると、

利用頭数維持(52,526頭) 預託料金を345円 預託料金維持(230円) 利用頭数を78,778頭

利用頭数2割増(63,032頭) 預託料金を268円 預託料金設定(300円) 利用頭数を53,635頭

各々設定すれば事業損益±0となる。

これらのシミュレーション結果及び放牧強度、粗収益係数を参考に、放牧利用促進対策や預託料金等、改善目標の設定が簡便に行なえる。